関連学会印象記

第65回IARS総会印象記

劔物 修*

International Anesthesia Research Society の第65回総会は1991年3月8日～12日に Texas, San Antonio において開催された．University of Texas Medical Branch (Galvestone) の Lawson 教授がプログラム委員長を務めた．会長の Marriott Rivercenter は San Antonio の中心に位置しており，周辺にはアラモの砦跡の記念館，タワー・オブ・アメリカ，テキサス文化センター，リバーウォークなどがあり，観光客で賑うところである．

学会では27テーマの review course lecture と口演とポスターを含めて358題の一般演題が発表された．Review lecture の8題が循環に関するものであった．輸血の時期と内容 (Ellison)，心疾患患者の術前評価 (Barash)，麻酔における経食道心エコー図の役割 (Abel)，敗血症性ショック (Pearl)，麻酔と人工心肺 (Reves) などが主なテーマであった．Review lecture の名のとおり，特別に新しい内容のものではなかった．一般演題のうち循環に関するものは98題で，全体の29.3%であり，開心術，とくに人工心肺，循環系モニタリング，薬物の心・循環系への影響に関するものが主であった．

学会発表は30～100人収容の比較的小さな会議室で行われ，日本のように大ホールが使用されるのとは対照的であった．発表もリラックスムードの中でできるし，質問もマイクなしで，名前も告げず，座ったままでのことが多かった．日本からの発表は，私共の5題を含めて15題あった．発表はスライドの助けもあり，それなりに進行するが，質問となると突然，別人に変身するというパターンは，以前より少なくなったと思われた．ある座長は「米国人は日本の学会で日本語で発表はできないが，日本の若い人の積極的に英語で発表する態度には感心する」というコメントをくれた．

Anesthesiology (7年)，Anesth Analg (14年) の Editor-in-Chief を努めてこられた Greene 先生が，今回やめられることになり，記念講演 (T. H. Seldon Distinguished lecture:Seldon 先生は Greene 先生の前に23年間 Anesth Analg の Editor-in-Chief を努められた) がもたれた．タイトルは "Anesthesia Journals: The Backbone of the Specialty-Past, Present, and Future" で，科学として麻酔学の専門分野の仕事を論文にするに当たっての注意点，論文を書く心構え，投稿から受理そして印刷されるまでの大変な作業などを，多くの経験から例を引いて説明された．受理される論文は約50%，投稿から印刷までスムーズにプロセスが進んでも1年はかかることも知らされた．麻酔関係の英文雑誌はこの20年間で3倍以上になった．J. Anesth (日本麻酔学会) の名も紹介されていた．量より質が問われることは雑誌の数が増えても，守って行く大切な基本であることを強調されていた．講演が終わると同時に約300人の会員は総立ちとなり，惜しみなく拍手を送り続けていた．立派な講演と永年の業績に対する感謝をこめてのものであった．

私事になるが，これまで Greene 先生には論文に関して多くの助言をいただいた．はからずも，2月末に受理された「Arterial tonometry during controlled hypotension」が先生にとって最後の仕事であったと知らされた．Editon-in-Chief は Miller 先生 (UCSF) Associate Editor-in-Chief には Tinker 先生 (Iowa) が Anesth Analg の新しい編集の責任者に決まっている．

湾岸戦争のために，一時は学会出席をキャンセルするつもりであったが，Greene 先生の講演の

*北海道大学医学部麻酔学講座

Presented by Medical*Online

ためにも出席してよかったと痛感した．Southwest Research Institute の Winter 氏と研究の打ち合わせもできたし，第11回日本循環制御医学会で来札された Davis, Forbes の両先生にも再会できた．Iowa の Tinker 先生とも，Oregon Health Sciences University の Stevens 先生とも意見交換の機会を持つことができた．

ハードスケジュールではあったが，何かと収穫の多い学会出席であった．次回総会は 1992. 3. 13-17, San Francisco である．

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

＊　＊　　＊　＊　　＊　＊

Presented by Medical*Online